

「資料をよむ」歴史学習に関する実践プランの提案

神 田 竜 也 (愛知教育大学非常勤講師)

土 屋 武 志 (愛知教育大学社会科教育講座)

(2003年11月28日受理)

A Proposal for a Plan of History Study that Using Primary Sources

Tatsuya KANDA (Part-time Lecturer, Aichi University of Education)

Takeshi TSUCHIYA (Department of Social Studies, Aichi University of Education)

要約 1999年の高等学校学習指導要領改訂において、「日本史B」の内容に「様々な歴史的資料の特性に着目して、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解させる」ための「資料をよむ」という項目が新たに加えられた。しかし現段階では具体的な授業実践もあまり見受けられない。そこで、NARAが提供している“Introduction to Documents”をもとに、資料そのものを学習することに重点をおいた実践プラン「資料について考えよう」を作成し、「資料をよむ」歴史学習への提案を行った。

Keywords: 資料 (史料)、歴史学習

はじめに

1999年の高等学校学習指導要領改訂において、「日本史B」の内容に、「様々な歴史的資料の特性に着目して、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解させる」ための「資料をよむ」という項目が新たに加えられた。これは歴史における資料⁽¹⁾についての学習であり、「日本史B」の導入として実施されることが位置づけられている。

この項目では、「雑誌・新聞等も含めた文献、絵画や地図、写真等の画像、景観、地名、習俗、伝承、言語など様々なものが歴史的資料となり得ることに気付かせるとともに、それら資料の有効性や限界等の基本的特性を踏まえた上で、それらから過去の出来事や景観、生活、思想、社会などを考察させる学習を通じて、生徒の思考力を高めることが期待される。そのために、資料を比較し、その比較から特色を発見したり、また、変化を読みとって、その変化の要因を推理し、さらに多様な資料を用いて多面的・多角的に考察し、総合的に論証する⁽²⁾」といった学習が期待され、「中学校社会科の学習との関連も視野に入れて、生徒の興味・関心から離れて細かな事項の教え込みになるようなことがないよう、抽象的でなく、生徒の親しみやすい具体的な資料を用いて作業的・体験的学習を行うよう指導計画を作成する必要がある⁽³⁾」ことも指摘されている。

2003年4月からは、この新学習指導要領に対応した日本史Bの教科書が刊行されるようになった。しかし、この「資料をよむ」の取り扱いについては、学習活動として決して十分な位置づけがされていないと思われる⁽⁴⁾。教科書であるため説明的になってしまうのは

やむを得ないのかもしれないが、記述を読んで学習活動を終わってしまうだけでは、本来目指すべき「作業的・体験的」学習とはおよそかけ離れたものになってしまう危惧もある。

また、新課程が始まって間もないこともあり、この「資料をよむ」に関する具体的な授業実践もあまり見受けられないのが現状であり⁽⁵⁾、実際の現場では手探りの状態ではないかと考えられる。

そこで本稿では、今後の実践に向けてのアイデアの一つとなるよう「資料をよむ」学習の実践プランを提案していく。

1. 実践プラン「資料について考えよう」の説明

今回提案する実践プラン「資料について考えよう」は、NARA (National Archives and Records Administration: アメリカ国立公文書記録管理庁) の教育スタッフにより作成された、資料について学習するための導入的なコンテンツである“Introduction to Documents”⁽⁶⁾をもとに、日本史Bの授業において1時間 (+家庭での調査) 完結で実践できるように独自に作成したものである。このプランは特定の歴史的事象についての理解を図るものではなく、あくまで資料そのものから情報を読みとることに重点をおいたものである。また作業的・体験的学習を行うために、ワークシートと発表・討論を組み合わせた授業形態としている点も特徴である。なお1時間完結としたのは、現状を考えた場合、実験的に試みるにはこの時間数が適当と判断したためである。

実践プラン：資料について考えよう(神田竜也作成)

【目標】 様々なものが資料になりえることに気づく
資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解する

【準備】 生徒…ワークシート1、自分が見せたい資料1つ
教師…ワークシート2・3・4、
資料分類表のプリント（黒田日出男氏作成の「史料とは何か」⁽⁷⁾）

【展開】

| | 生徒の学習活動 | 教師の支援 |
|----|--|---|
| | 見せたい資料について発表しよう | |
| 10 | ワークシート2をもとに、持ってきた資料がどのようなものなのかを考え、各自発表する | ワークシート1回収、ワークシート2・プリント配布 資料を持ってこなかった生徒に対しては、自分の記憶も資料になることを指摘し、授業に参加させる |
| 20 | | 様々な資料があることを気づかせるようにする、またワークシート2の内容が史料批判の基本的視点あることを説明する |
| | 資料から昔の生活を発見しよう | |
| 30 | ワークシート3をもとに、自他の資料から読みとれる昔の生活について各自の考えを発表し、討論する | ワークシート3配布 生徒の持ってきた資料などから、気づいた点を指摘する |
| 40 | | 資料に基づいて歴史が叙述されることを説明する |
| | 本時を振り返り、感想をワークシート4に記入 | ワークシート4配布 ワークシート2・3・4回収 |

【評価】 <社会的事象への関心・意欲・態度>
身近な資料を積極的に調べようとする
<社会的な思考・判断>
それぞれの資料から、その資料が作られた時代を考察することができる
<観察・資料活用の技能・表現>
作成年・作成者などの情報を資料から読みとることができる
<社会的事象についての知識・理解>
多様なものが資料になりえることに気づくとともに、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解し、その知識を身に付ける

■ワークシート その1■

次の授業までに、家族や身近な大人の助けを借りて、あなたが成長してきた間に保存されてきた生涯の思い出となるもの（例えば写真・手紙・日記・新聞の切り抜き・母子手帳・通知表・学校のプリント・卒業証書など）を詳しく調べてみましょう。

どのようなものがあったかな？

この中から、クラスのみんなや先生に見せたいものを1つ選んで、学校に持ってきましょう。

「ワークシートその1」は、事前学習として行う活動を指示した問いである。

この学習活動は、各自の身近にある資料（ここでは自分の歴史に関する資料）から、多様な資料があることを気づかせるためのものである。

■ワークシート その2■

今日持ってきた資料について、次のことがわかるように発表しよう。

1. どんな種類の資料ですか？
2. いつ頃の資料ですか？ それはどうしてわかったのですか？
3. 誰が作った（あるいは使っていた）資料ですか？
4. あなたとどのような関係がある資料ですか？

「ワークシートその2」の1～4は、基本的な史料批判の視点を学ぶための問いである。

また1に関しては、多様な資料があることをより明確に気づかせるため、また記述の助けとするために、資料分類表のプリントとして、黒田日出男氏が作成した「史料とは何か」を用意した。

■ワークシート その3■

あなたの資料や他の人の資料をもとに考えて、次の問いに答えよう。

1. これらの資料はどうして作られたのかな？
2. これらの資料はどうして今でも残っているのかな？
3. これらの資料によって、昔の生活について発見したことはあるかな？

「ワークシートその3」の1・2も史料批判の視点を学ぶための問いである。また2は、資料が残されていることの意味を気づかせるものである（多くの場合、意識的に残そうという行為があったからこそ資料が残されている）。資料を将来に残していく重要性にも気づいてもらいたいという意図を含んでいる⁽⁸⁾。

3は、資料から社会的事象を読みとる、いわば“歴史を叙述する”作業のための問いである。何を資料から読みとり、それに基づいてどのようなことを発見したのかを記述してもらおう。

■ワークシート その4■

今日の授業の感想

「ワークシートその4」は授業の振り返りのためのものである。

2. 考察

このプランをもとに大学生（学部3年生7名）の協力を得て50分の模擬授業を実践した。以下、この模擬授業を実践した中で気づいた問題点を述べていく。

・補助プリントの使用に関して

まず、多様な資料があることに気づいてもらうために、「史料とは何か」という資料分類表を用いたのだが、生徒はどこに該当するのかということばかり気になってしまったようである。分類表に基づいて資料を位置づけることも大事なことだが、資料を考えるという点では、プリントを使用せず、自由記入としたほうが良かったのかもしれない。

・資料の読みとりについて

持ち寄った資料から昔の生活について発表・討論し、そこから資料に基づいて歴史が叙述されることを理解させることをねらったが、7名分の資料しかなかったこと、お互いの資料を見る時間が十分確保できなかったこともあり、活発な議論には至らなかった。授業中に歴史像を描くことを重視するのであれば、ある特定の時期に限ったほうがより学習効果があるものになったかもしれない。例えば小学校6年生の時というような限定を付けて各自で資料を持ち寄り、その持ち寄った資料から当時の歴史像を作り上げていくという学習が実践できるのではないだろうか。

・教師の力量について

授業が始まるまで生徒がどのような資料をもってくるのかわからないために、教師は準備なしで議論をまとめていかなければならない。また生徒が持ってきた資料からの確かな情報を読みとって提示することも必要とされる。うまく生徒から発言を引き出すためには、ある程度討論形式の授業に慣れておく必要があると思われる。

・評価方法について

今回の実践では、具体的にどの場面で評価するかを検討していなかったため、実際に評価を行わなかった。ただし、評価場面に関しては、主にワークシート・発表・討論の各場面で設定できるものと考えている。

これ以外にも、多人数でこの実践が可能かどうかという点が大きな問題点として残されている。この点については、数人ずつのグループ内で発表・討論させていくということによって解決できるのではないかと考えている。

以上のような問題点はあるものの、学生の書いた感想を読むと、歴史が身近なものであることを認識し、資料から歴史を描くことを実感している様子が見取れ、「資料をよむ」歴史学習の実践プランとして一定の成果があったものと考えている。

——ワークシートその4に書かれていた感想

(抜粋) ——

・昔の思い出のふれることができたし、その思い出を引き出す文章も問題意識によって必要な史料になったりする事をしたし、また史料にするにもその史料を批判して、信頼できるものかなどを考えなければならぬということを知った。

・歴史というのは史料の積み重ねで成り立っている学問であることを改めて認識しました。

・今までの歴史の授業は、まず教科書の内容があって資料があるというイメージがありましたが、今日の授業では、まず資料があってそこから歴史が叙述（推論）されるという事が分かった。

・こういった資料というものも、残っていないと意味がないと思った。そういった意味で資料の保存というのも大切になってくると思った。普段は何げなく見たり使ったりしているものでも、後で考えると意外と重要な資料になりうると思った。

・同じ資料にしても見方を変えることでいろいろな問題を考えることができると思った。

・どうして作られて、どうして残っているかって訊ねられると、その時の気持ちを思い出せたり想像できたりしておもしろい。

・自分の書いた手紙でも、これを手がかりとして当時の社会状況にせまることができるのかなと思った。

・史料として持ってきたアルバムを久しぶりに見て、自分自身の成長過程を改めてふり返り思い出すことができた。それにワークシートを通して、史料批判をしたことで、写真に写っているものから、その写真が撮られた時の流行や、生活をとらえることができ、このアルバムが史料としてなりえた。



授業に持ってきた資料の一例

おわりに

今回、資料そのものを学ぶことに重点を置いた実践プラン「資料について考えよう」を提案した。このような実践は、従来の歴史学習から見れば異質なものと感じられるかもしれない。しかし、歴史というものを身近に感じさせるためには、このような身の周りの資料を用いた学習もあってよいのではないかと筆者は考えている。

いずれにしても「資料をよむ」歴史学習は、思考力を育成するための有効な学習活動となりうることは間違いないだろう。どのような学習方法が本当に有効な「資料をよむ」歴史学習となりうるのか、今後も検討を重ねていきたい。

【註】

- (1) 本稿では学習指導要領の表記に準じて、原則として「資料」と表記する。
- (2) 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』(1999)、pp.114-115
- (3) 同上、p.115
- (4) 例えば山川出版社『詳説日本史』においては、「長屋王の変を探る」が学習指導要領の「資料をよむ」に該当するが、目次の前に口絵と同列に位置され、学習すべき内容というより、コラム的な位置づけとなっている。
また「身近なテーマを設定し、私たちが歴史像が構築されていく課程を体験することで、自分で歴史を考察できる力を養おう。」(同書、p.IV)となげかけるが、具体的方法が提示されているとはいえない。このようなことを述べるのであれば、身近なテーマで「資料をよむ」を記述すべきではないだろうか。
- (5) 管見の限りでは、埼玉日本史教育研究会『新たな日本史教育をめざして—資料をよむ 資料にふれる— (実践報告第1集)』(2003)、島村圭一「「資料をよむ」主題学習の構想 —中世の埋蔵銭を中心に—」(『歴史と地理』567、2003)がある。
- (6) “Introduction to Documents”については、神田竜也「小学校でも「資料に基づいて歴史が叙述されている」ことを学ぶ歴史学習を」(愛知教育大学社会科教科書改善研究会編『小学校社会科歴史教科書の改善に向けて—文部科学省平成13年度教科書改善のための実践的調査研究報告書—』2002)で紹介・訳出を行っているのでご覧いただきたい。また原文については、NARAのWebページ上で提供されている。URLは
http://www.archives.gov/digital_classroom/introductory_activity.html

なお、NARAは資料の教育利用に関する取り

組みを積極的に行っており、各種資料分析のためのワークシートも作成・提供している。これらの詳細については、神田竜也・森田貴之「「資料をよむ」ために—“History in the Raw” “Document Analysis Worksheets”の紹介—」(愛知教育大学社会科教育学会『探究』13、2002)をご覧いただきたい。

- (7) 黒田日出男編「史料学と絵画史料」(『朝日百科日本の歴史別冊 歴史の読み方1 絵画史料の読み方』朝日新聞社、1988)で提示されている。
- (8) アーカイブズ学の安藤正人氏は「人間社会のさまざまな組織体には、本来、公私を問わず、その活動の産物である文書記録を保存し、人類共有の文化遺産として、あるいは社会の発展に有用な情報資源として公開利用に供する責務がある—それが民主主義社会のルール」という認識を示している(安藤正人『草の根文書館の思想』岩田書院、1998 p.12)。筆者もこのような認識に同意しており、私たちが作りだしている資料を保存し、未来に残していくことの重要性についても、社会科、歴史(あるいは公民)の授業での学習内容に組み込んでいくべきではないかと考えている。

【謝辞】

模擬授業にご協力いただいた日本史概説Ⅱの受講生の皆様に深く感謝いたします。

【付記】

本稿は土屋武志の指導のもと、神田竜也が執筆したものである。

本稿は平成15年度科学研究費補助金(奨励研究、研究者：神田竜也、課題番号：15904025、研究課題：「資料をよむ」歴史学習に関する研究)の交付を受けて行った研究の成果の一部である。